

Visual COBOL チュートリアル

COBOL 開発 : Visual Studio

-.NET COBOL の単体テスト

1. 目的

本チュートリアルでは、.NET COBOL プログラムに対するテスト作成、実行方法、および、テスト結果を表示させる方法の習得を目的としています。

MFUnit は、Visual COBOL に搭載された xUnit 系の単体テストフレームワークです。xUnit はオブジェクト指向型の単体テストフレームワーク SUnit に起源を持つ JUnit や RUnit 等の単体テストフレームワークの総称です。MFUnit は xUnit の設計アーキテクチャーや仕組みは取り入れつつも COBOL 開発者にとって扱いやすい手続き型の COBOL を対象とした単体テストフレームワークという設計思想の下、開発されました。

MFUnit は COBOL 開発作業に以下の利点を提供します。

- テストを繰り返し実行させることができるため、修正作業時などのテスト工数の削減が見込める
- Jenkins などの継続的インテグレーション (Continuous Integration) ツールと連携によりテストの自動化が行え、DevOps サイクルの導入が足がかりを作れる

2. 前提

- 本チュートリアルで使用したマシン OS : Windows Server 2022
- Visual COBOL 9.0 for Visual Studio 2022 がインストール済みであること

本資料は、.NET COBOL に対する単体テストフレームワークの利用方法を記載したチュートリアルです。ネイティブ COBOL の単体テスト実現方法については、別チュートリアルを参照ください。

下記のリンクから事前にチュートリアル用のサンプルファイルをダウンロードして、任意のフォルダに解凍しておいてください。

[サンプルプログラムのダウンロード](#)

内容

1. 目的
2. 前提
3. チュートリアル手順の概要
 - 3.1. IDE からの実行
 - 3.1.1. Visual Studio の起動
 - 3.1.2. チュートリアルプロジェクトの作成
 - 3.1.3. MFUnit テストの作成
 - 3.1.4. MFUnit テストの実行
 - 3.2. コマンドラインからの実行

3. チュートリアル手順の概要

3.1. IDE からの実行

3.1.1. Visual Studio の起動

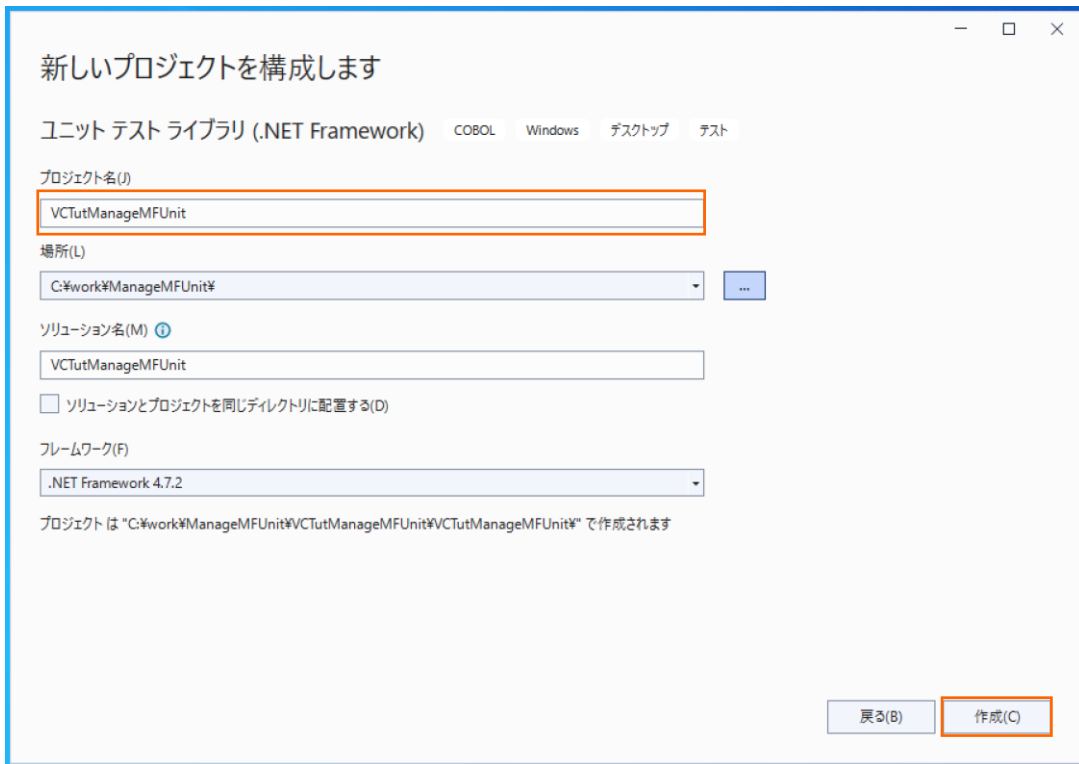
- 1) スタートメニューより、Visual Studio 2022 を起動します。

3.1.2. チュートリアルプロジェクトの作成

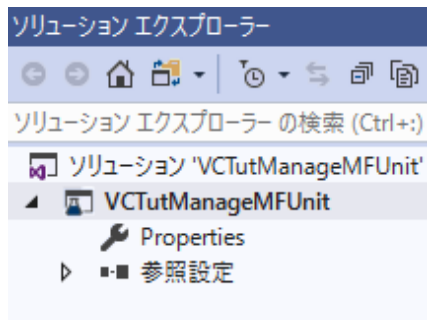
- 1) [新しいプロジェクトの作成] をクリックします。
- 2) 言語に “COBOL”、プロジェクトの種類は “テスト” を選択し、「ユニットテストライブラリ(.NET Framework)」を選択した上で、[次へ(N)] ボタンをクリックします。



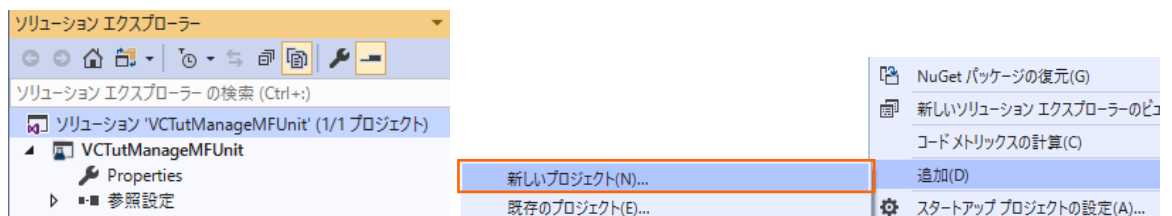
- 3) プロジェクト名に “VCTutManageMFUnit” を入力し、[作成(C)] ボタンをクリックします。



新規プロジェクトが作成されます。



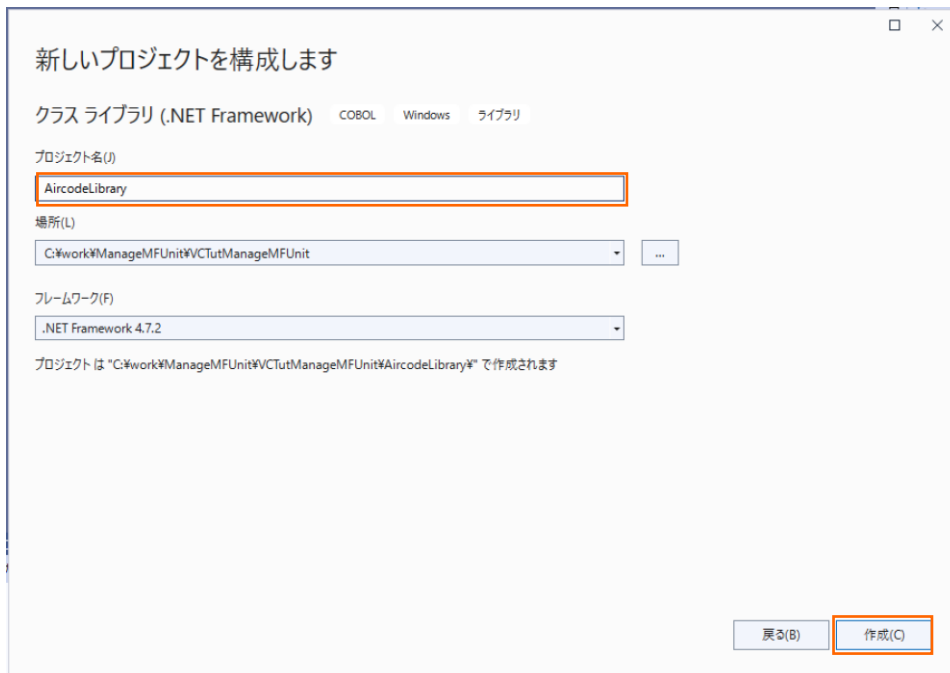
- 4) VCTutManageMFUnit ソリューション名を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[追加(D)] > [新しいプロジェクト(N)] を選択します。



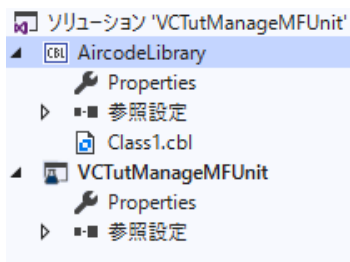
- 5) 言語に “COBOL” を選択し、プロジェクトの種類は「ライブラリ」を選択し、表示された一覧から「クラスライブラリ (.NET Framework)」を選択し、[次へ(N)] ボタンをクリックします。



6) プロジェクト名に “AircodeLibrary” と入力し、[作成(C)] ボタンをクリックします。



プロジェクトが作成されます。

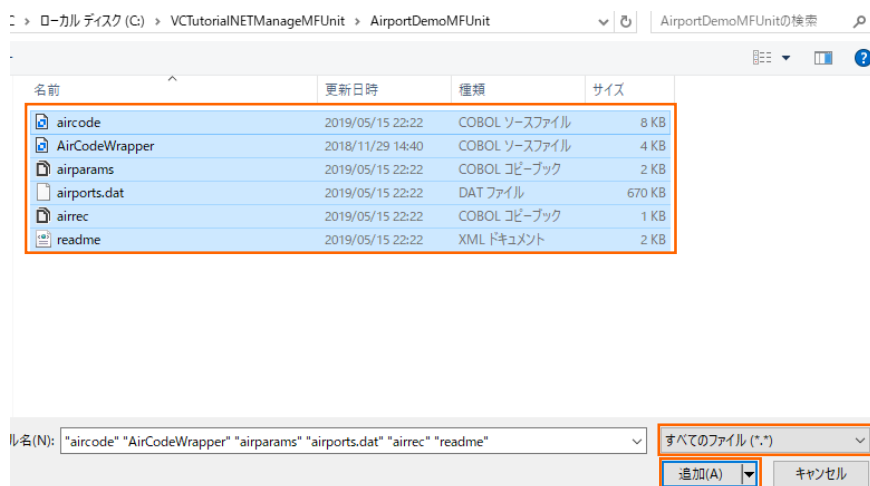


AircodeLibrary プロジェクト配下の Class1.cbl は不要のため、削除してください。

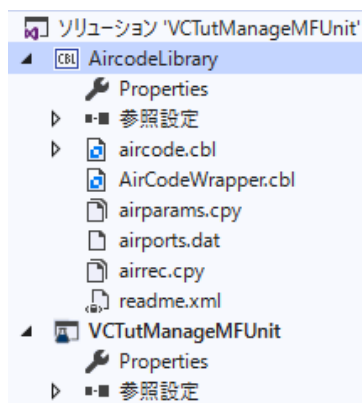
- 7) AircodeLibrary プロジェクト名を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[追加(D)] > [既存の項目(G)] を選択します。



- 8) サンプルファイルを展開したフォルダ内の AirportDemoMfUnit フォルダ配下を選択し、“すべてのファイル(*.*)” を選択した結果、表示される全てのファイルを選択した上で、[追加(A)] ボタンをクリックします



プロジェクトが、以下のようになります。



aircode.cbl はレガシーなネイティブ COBOL プログラムです。AirCodeWrapper.cbl は .NET 言語から容易に COBOL プログラムを呼び出すための Wrapper クラスです。

- 9) AircodeLibrary プロジェクト名を選択した状態で、Visual Studio IDE メニューより、[ビルド(B)] > [AircodeLibrary のビルド(U)] を選択します。



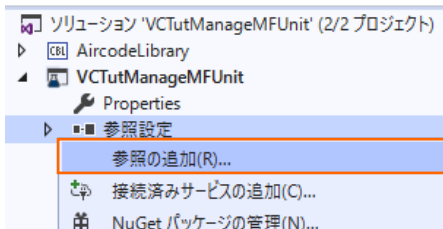
プロジェクトのビルド処理が行われ、DLL が作成されます。



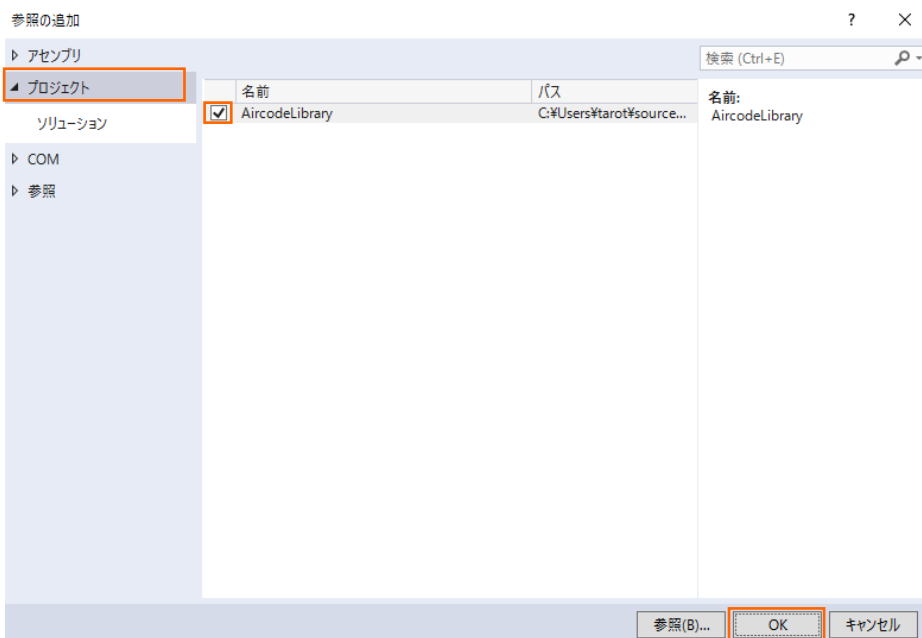
3.1.3. MFUnit テストの作成

さきほど追加した AircodeWrapper.cbl に対する単体テストを作成します。

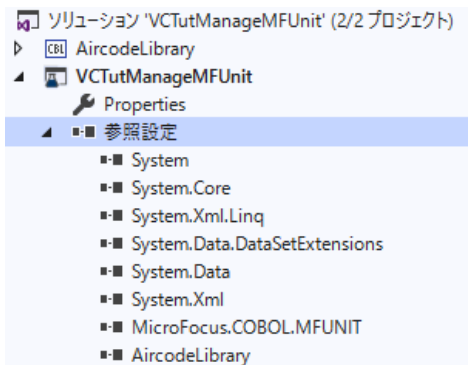
- 1) VCTutManageMFUnit プロジェクト配下の「参照設定」を選択した状態で、マウスの右クリックにてコンテキストメニューを表示し、[参照の追加(R)] を選択します。



- 2) プロジェクトタブを選択し、AircodeLibrary 項目のチェックを行った後、[OK] ボタンをクリックします。



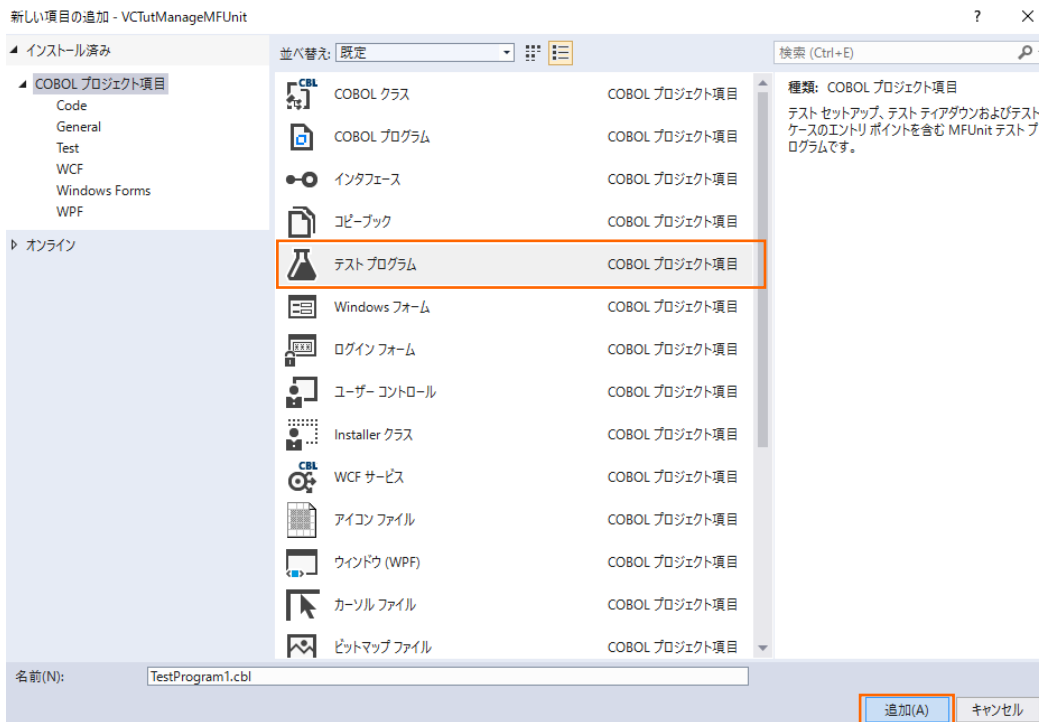
参照設定に、AircodeLibrary が追加されます。



- 3) VCTutManageMFUnit プロジェクト名を選択し、[追加(D)] > [新しい項目(W)] を選択します。



- 4) 「テスト プログラム」を選択し、[追加(A)] ボタンをクリックします。



- 5) 新規のテストケース（羽田・ロンドンヒースロー空間間の距離 (km) のテスト）を追加した上で、実行を行いません。サンプルファイルを展開したフォルダ内の TestProgram1.cbl で、現在の TestProgram1.cbl を上書きしてください。これは、テストケース “testDistance” を途中まで作成したものになります。プログラムを確認すると、MFU-TC-SETUP-PREFIX, MFU-TC-PREFIX, MFU-TC-TEARDOWN-PREFIX から始まる “testDistance” の 3 entry が定義されていることが分かります。MFUnit では、テストを下記のように決められた手順で実行しています。

- ① entry MFU-TC-SETUP-PREFIX & “testDistance”
- ② entry MFU-TC-PREFIX & “testDistance”
- ③ entry MFU-TC-TEARDOWN-PREFIX & “testDistance”

MFU-TC-SETUP-PREFIX で始まる entry にて、テストの前処理を定義できます。前処理の代表例としては、ファイルをあらかじめオープンしておくなどが考えられます。一方、MFU-TC-TEARDOWN-PREFIX で始まる entry では、テスト実行後の処理を定義できます。前処理でオープンしたファイルをクローズするような処理が該当します。前処理、後処理ともに省略可能です。

注意)

2 5 行目に、airports.dat へのパスが指定されているため、環境に合わせて修正してください。

テスト本体である MFU-TC-PREFIX を確認すると、下記のように結果検証コードが実装されていません。

```
entry MFU-TC-PREFIX & "testDistance".
  *> set environment variable
  display "dd_airports" upon environment-name.
  display "C:\path-to-datafile\airports.dat" upon environment-value.

  declare clazz = new AircodeLibrary.AirCodeWrapper();
  invoke clazz::OpenFile();
  invoke clazz::GetDistance("HND", "LHR") returning distance-km.
  invoke clazz::CloseFile();
```

このテストを実装するため、以下のコードを上記 entry 句の最終位置に含まれるよう、挿入してください。

```
set exp-distance-km to 9591.
if exp-distance-km = distance-km
  then
    goback returning MFU-PASS-RETURN-CODE
  else
    string
      "expected "
      exp-distance-km
      ", but "
      distance-km
      into err-msg
    end-string
    call MFU-ASSERT-FAIL-Z using err-msg
  end-if.
```

補足)

テスト失敗時の記述方法として、成功時同様に、戻り値で返す方法は、以下の通りです。

```
if exp-distance-km = distance-km
  then
    goback returning MFU-PASS-RETURN-CODE
  else
    string
      "expected "
      exp-distance-km
      ", but "
      distance-km
      into err-msg
    end-string
    display err-msg
    goback returning MFU-FAIL-RETURN-CODE
  end-if.
```

戻り値 MFU-FAIL-RETURN-CODE を利用する場合、テスト結果を確認するためにエラー情報を、display などで出力する必要があります。

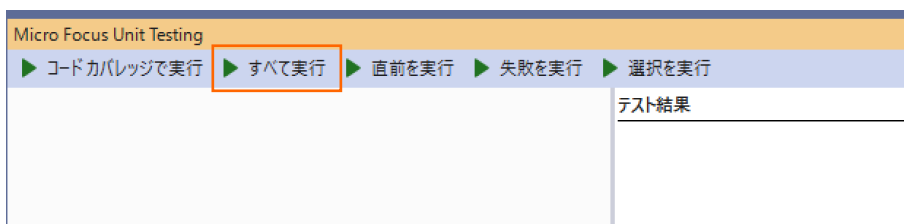
3.1.4. MJUnit テストの実行

本テスト対象のプログラムは、環境変数で設定された空港情報が保存されたデータファイルを参照するため、手順内で設定を行います。

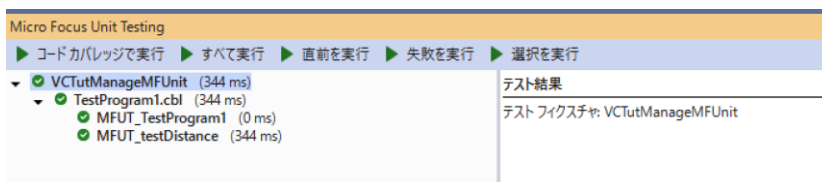
- 1) Visual Studio IDE メニューより、[表示(V)] > [Micro Focus Unit Testing] を選択します。



- 2) Micro Focus Unit Testing ビューより、[全て実行] ボタンをクリックします。



以下のように全て緑色のマークが設定されます。緑色は、テストに成功したことを示します。

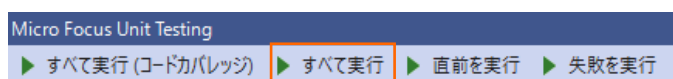


- 3) エラーケースを確認します。「TestProgram1.cbl」をエラーとなるように修正した上で、再度、Micro Focus Unit Testing ビューより、[全て実行] ボタンをクリックします。

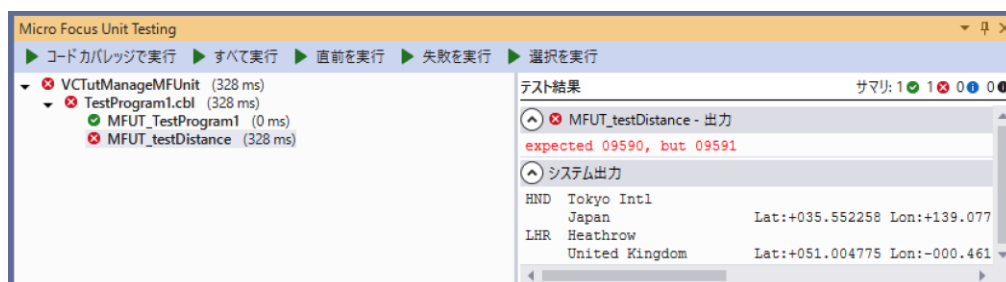
なお、本例では、3.1.3 で作成したテストプログラム内に記載されていた期待値 9591 を 9590 に修正しています。

```
entry MFU-TC-PREFIX & "testDistance".
  *> set environment variable
  display "dd_airports" upon environment-name
  display ""C:#Users#Public#Documents#Micro

  declare clazz = new AirCodeWrapper() ;
  invoke clazz::OpenFile() ;
  invoke clazz::GetDistance("HND", "LHR") ret
  invoke clazz::CloseFile() ;
  set exp-distance-km to 9590.
  if exp-distance-km = distance-km
    then
      goback returning MFU-PASS-RETURN-CODE
  else
    string
      "expected "
      exp-distance-km
      ", but "
      distance-km
      into err-msg
    end-string
    call MFU-ASSERT-FAIL-Z using err-msg
  end-if.
```



MFUT_testDistance のテストで、エラーが発生したことが一覧から判断できます。

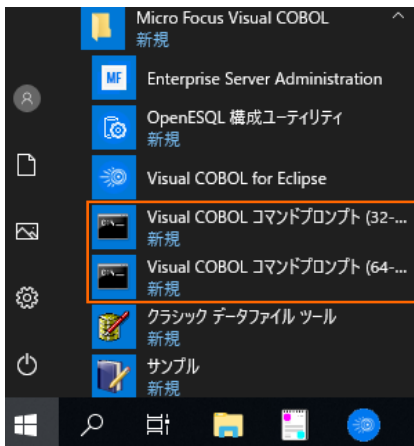


3.2. コマンドラインからの実行

MFUnit によるテストは、Visual Studio 上の画面からではなく、コマンドライン上からも行なうことができます。従来のスタイルでのテスト作業の効率化を図ることができ、Jenkins などの CI ツールと連携する事で、テストの自動実行を行なえるため、品質担保や作業工数の削減が見込めます。

ここでは、3.1.1 で作成したテストプログラムをコマンドラインから実行する方法について学びます。

- 1) スタートメニューより、実行環境に合わせた [Visual COBOL コマンドプロンプト] をクリックします。



- 2) 作業フォルダを作成し、作成したフォルダに移動します。

```
C:¥>mkdir VCCommandTutorial
C:¥>cd VCCommandTutorial
C:¥VCCommandTutorial>
```

3) 3.1 で作成したソリューションが保存されているフォルダを VS_SOLUTION_PATH に指定した上で、下記コマンドを実行します。

- set VS_SOLUTION_PATH=c:¥vs_solution_path
- cobol %VS_SOLUTION_PATH%¥AircodeLibrary¥AircodeWrapper.cbl
ilsource(%VS_SOLUTION_PATH%¥AircodeLibrary¥aircode.cbl) iloutput(.) ilgen(sub);
- cobol %VS_SOLUTION_PATH%¥VCTutManageMFUnit¥TestProgram1.cbl iloutput(.) ilgen(sub)
sourceformat(variable) ilref(AircodeWrapper.dll);

注意)

VS_SOLUTION_PATH は、各環境に合わせて修正してください

```
C:¥VCCommandTutorial> set VS_SOLUTION_PATH=c:¥vs_solution_path
C:¥VCCommandTutorial>cobol %VS_SOLUTION_PATH%¥VCTutManageMFUnit¥TestProgram1
.cbl iloutput(.) ilgen(sub) sourceformat(variable) ilref(AircodeWrapper.dll);
Micro Focus COBOL
Version 9.0 (C) Copyright 1984-2023 Micro Focus or one of its affiliates.
* チェック終了 : エラーはありません
C:¥VCCommandTutorial>cobol %VS_SOLUTION_PATH%¥VCTutManageMFUnit¥TestProgram1
.cbl iloutput(.) ilgen(sub) sourceformat(variable) ilref(AircodeWrapper.dll);
Micro Focus COBOL
Version 9.0 (C) Copyright 1984-2022 Micro Focus or one of its affiliates.
* チェック終了 : エラーはありません
```

以下のファイルが作成されていることを確認します。

```
C:¥VCCommandTutorial>dir
ドライブ C のボリューム ラベルがありません。
ボリューム シリアル番号は 969A-9F98 です
C:¥VCCommandTutorial のディレクトリ
2023/10/04 16:03 <DIR> .
2023/10/04 16:03 <DIR> ..
2023/10/04 16:02 14,336 AircodeWrapper.dll
2023/10/04 16:03 8,704 TestProgram1.dll
2 個のファイル 23,040 バイト
2 個のディレクトリ 34,364,583,936 バイトの空き領域
```

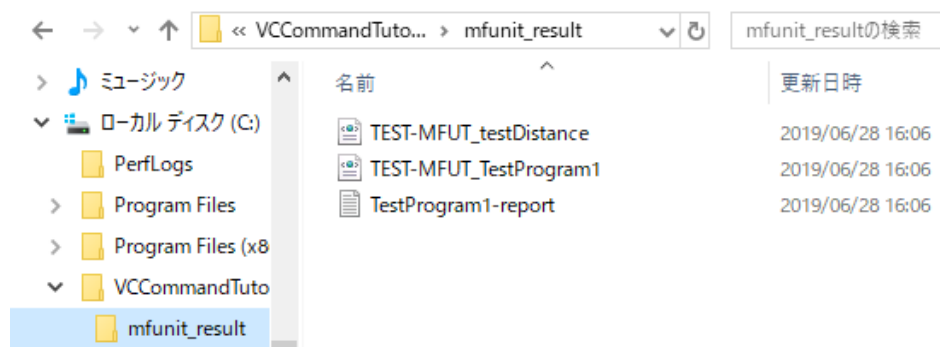
- 4) プロンプト上で下記コマンドを実行し、MJUnit を実行します。
- set dd_airports=%VS_SOLUTION_PATH%¥AircodeLibrary¥airports.dat
 - mfunirunil -report:junit -outdir:mfunit_result TestProgram1.dll

補足)

.NET COBOL プログラムに対する単体テストは、mfurun ではなく、mfurunil を使用します。

```
C:¥VCCCommandTutorial>mfurunil -report:junit -outdir:mfunit_result TestProgram1.dll
Micro Focus COBOL - mfurunil Utility
Unit Testing Framework for Windows/.Net/64
Fixture : TestProgram1
Test Run Summary
Overall Result          Passed
Tests run               2
Tests passed           2
Tests failed            0
Total execution time   289
```

outdir オプションにより、出力結果を mfunit_result フォルダに保存されていることを確認してください。



WHAT'S NEXT

- 本チュートリアルで学習した技術の詳細については製品マニュアルをご参照ください。

免責事項

ここで紹介したソースコードは、機能説明のためのサンプルであり、製品の一部ではございません。ソースコードが実際に動作するか、御社業務に適合するかなどに関しまして、一切の保証はございません。ソースコード、説明、その他すべてについて、無謬性は保障されません。ここで紹介するソースコードの一部、もしくは全部について、弊社に断りなく、御社の内部に組み込み、そのままご利用頂いても構いません。本ソースコードの一部もしくは全部を二次的著作物に対して引用する場合、著作権法に基づき、適切な扱いを行ってください。